
五十音字物語

ぬじゃわきし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

五十音字物語

【Nコード】

N1391N

【作者名】

ぬじゃわきし

【あらすじ】

五十音字にはそれぞれ性格や意思があり世界があった！彼らは人間の言葉を奉仕する存在。だがある日、「わ」のストレスと、な行たちの反乱を起こし、人間たちの言語喪失と大戦争が起きる！

第一章・・・五十音たち あ行

あいいうえお。五十音字はこの五音から始まる。これらは皆母音と呼ばれた。母音は五十音字の根幹と呼ばれた。事実、彼らの特徴はあいいうえお以外の語の特徴にまで引き継がれ、性格を作り上げる要素の一つになっていた。そのためあ行の母音たちは五十音字の中でも権力が非常に高かった。

リーダー格の”あ”は常に上昇志向であつた。わが道を正しいと信じ、猪突猛進に行動した。そういった行動は”い”にとつて理解し難かつた。彼は神経質で臆病で慎重派でとてもそんな行動はできなかったが、自分達はそういう思い切つた”あ”に従うべきと考えていた。彼が怖かつたからだ。困つたのは”う”が常に賛同できぬ様子を見せていた事である。彼は常に鬱々としていて、何事も乗り気でなかつたため”い”はいつも苛苛としていた。”う”は母音としての仕事嫌で、自ら勝手に子音になることがあり「うい」「うえ」「うお」などと仮想の自分の分身を作つていた。ところがこの分身が力を得たおかげで”ゐ”と”ゑ”は仕事を失い、”う”を深く恨むようになった。”え”は冷笑的でひねくれていた。母音の中では地味だが、その地味さに甘んじている狡猾さがあつた。”お”は比較的心の広い者だが、”あ”に続いて行動的でもあり、力による正義を求め、ごり押しで物事を進める一面があつた。

母音達はあいいうえおと小文字として身を潜める事ができた。だが、身を潜めたところで他の字と関わることはめつたに無く、ただ、「ああ」とそのまま自ら身を縮めて嘆息するだけであつた。

か行

か行すなわちかきくけこは五十音字の中で特にとげとげしい攻撃的な性格を帯びていた。五十音字は平常は平仮名だが、一種の緊張状態に陥ると片仮名の表情になった。だが、彼らか行は片仮名でも力キクケコと平仮名の平常なときと表情がほぼ同じで、普段の行いがそうだったのか、もともとから気難しいからなのか、とにかく厄介な人々であった。リーダー格の”か”はとにかく議論が大好きで相手を打ち負かす事に達成感を得ていたので、”か”とわざわざ関わろうとするものはいなかった。そうか、思うか、どうなのか、と彼は語尾に自分の名前を入れて話す癖があった。これに濁点がついて”か”になると、それが？と思うが？どうなのが？とますます攻撃的に断定的にずけずけと声を荒げて責め立てる。五十音字に濁点がつくのは通常一時的な怒りや狂乱した状態などが原因であることが多いので、ほとんどの五十音字は彼を怒らせないようにしていた。”き”も彼と同様厄介者であったが、むしろ議論好きよりと言うよりヒステリックで、こちらは無視すれば良かった。”く”は発狂していた。周囲への憎しみや嘲りを露にし、”き”が「きーきー」喚くのに対し、”く”は「くくく」と不気味な忍び笑いをしていた。”け”は行動力はないものの反骨精神に溢れていて、周囲からは犯罪者の卵のように見られていた。事実彼は常に不気味な悪巧みを思いついていたり”け”なりの薄気味悪い笑みを浮かべていた。そんなか行だが”こ”だけは落ち着いていた。彼はか行を監視し、バランスが取れるようにやりくりした。

さ行

対象的にさ行は落ち着いた冷静さを持っていた。彼らは哲学者のように常に考え事をし、聖職者のように場の平静さを求めている。”さ”は彼らの中では社交的であつたが、”し”は無礼者には口うるさかつた。”す”は何も語らず非常に落ち着いていたが、”せ”は自分の部屋の外、つまり外界の喧騒に常に苛苛としていた。”そ”はさ行の中でも積極的に社交的であつたが、俗世間と繋がっているということ疎外されていた。

だが、静かな彼らもさじさじと濁音になれば攻撃的であつた。特に”ず”は普段が静かなだけに非常に様変わりし、ひじょうに残酷であつた。

た行

た行は奇妙な集団であつた。というのは同じ行にいながら”ち”と”つ”のように性質の異なる面々が同居していたからである。例えば”た”はポジティブ思考だが乱暴者で困りものであつたが、”ちは心の細い愚痴屋であつた。”て”は暴力に走る傾向が強く、あのか行さえも彼を怯えていた。”く”が”て”と一緒に「てくてく歩いたとき、アクセントが”て”に置かれたように、あの狂つた”く”が目立たなくなっていた。”て”が彼を殴るからだ。怖くて身を縮めていたのだ。だが、彼は小文字になることはできない。”とは乱暴さはそこまでなくひょうきんであつたが、実直で行動的であつたので、間を取り次ぐ役、すなわち助詞の仕事をしていた。「魚と人」みたいに。

さて、特筆しておくべきは”つ”である。彼は数少ない小文字になれる才覚があつた。彼は一見平常に見えたが、嫌がらせが大好きであつた。例えば”あ”に対し、身を潜めて「あつ」と突っかけて転ばすのが日ごろの趣味であつた。

”た”、”て”、”と”は濁音になると”だ”、”で”、”ど”とより乱暴になるだけであつたが、”ち”、”つ”は濁音になると”ぢ”、”づ”とさ行の”じ”、”ず”のごとく毒々しい攻撃性を帯びていた。だが、彼らが濁音になったところであまり見向きもされず、なに”じ”、”ず”の真似をしているだとあざ笑われるだけでそれが”ち”と”つ”の密やかなコンプレックスでもあつた。

な行

濁点という概念にはな行にはなかった。その代わり彼らは非常に粘着質で生意気であつた。生意気なのも当然、彼らは自分があいいうえおから生まれたのではなくあの奈落の神の異名をもつ”ん”様から生まれたのだと思ひ込んでいたからだ。例えば”な”は笑いながらよく人に絡み、自分は何もかもよく分かっているかのように「な」と相手の肩をたたく事が多かった。”に”に至つては狡猾でずる賢く、人の心理をいかに操るかを研究しているぐらいだ。そしていつも”に”はにたにたと笑つていたので周囲は彼が何を考へているかが分からなかった。不気味である。”ぬ”は引き籠もりで、何も考へていなさそうな性格であつた。そのために皆から不気味がられていた。”ね”は何かと猫なで声で人に絡み、厭味ばかり言う性質の悪い者であつた。いつか”と”と”ね”が共にいた時、あまりの付き合ひにくさ話しにくさに「ねとねと」と感じたらしい。”の”はひょうきんとしていて飽きっぽく、助詞の仕事をいやいやこなしていた。つねに眠そうであつた。

な行は一癖二癖あつた。彼らを説得させるためには後に述べる”ん”が必要であつたことを述べねばなるまい。

は行

は行はマルチタレントで、半濁音としてばぴぺぼとおどける事ができた。彼らは真面目でかつかなり感情的であった。その昔、古文として、あいうえおの代役をした事さえある。リーダー格の”は”は正に真面目で意見も言えるしっかり者だったので、助詞の仕事を任された。だが、彼が助詞の仕事をするとき、何故か発音が”わ”と全く同じになったのは本人にとっても不思議であった。また、それは同時に”わ”にとって”は”が憎しみの存在となったのはのちに後述する。真面目な彼に反して”ひ”は気が狂っていた。それはむしろ根が真面目なためかもしれない。”く”よりも重症で、毎日泣いたり笑ったり悲鳴を上げたりしている。「ひひひひーひーひーひーひーひー」彼は感情の根本から壊れていた。”へ”は周囲から不気味がられていた。いつも冷たい薄笑いを浮かべ、片仮名の緊張状態でも”へ”とまったく表情に変化はない。その上、彼は”は”同様助詞の仕事をしていたが、あの母音の”え”と全く同じ発音をしていて、”え”様をさしおいて助詞になったのか、とさえ噂された。”ふ”と”ほ”は似たもの同士で享楽主義者であった。違いといえば”ふ”は安息をゆったり味わうのが好きで”ほ”は幸せを一気に味わうのが好きであった。例えば風呂に長らく浸かるのが好きなのが”ふ”で、寒い中一気に入るのが好きなのが”ほ”であった

ま行

ま行は他の音たちより比較的行動的ではないので、穏健派と思われる。だが、それはうわべだけで、彼らは常にストレスにさらされ、苛苛むずむずとしていた。”ま”は人のいい誠実な上司のようだと思われたが、腹の内ではストレスを抱え、人目につかない所でそれを発散していた。”み”に至っては人をねちこく毒舌で責めるのが好きで、ま行の中では非常に嫌われていた。”む”は無口であったが、それは苛苛しているためであり、無口と言うよりむすつとしていた。彼一人で「無」を表現できたが、彼にとってはその意味を投げやりだと思っていた。”め”は”み”の次に嫌われていた。彼は人を裁くのが好きであった。五十音字の些細な悪事に目「め」をつけ、「だめ」「やめ」「さだめ」と禁止ばかりしていた。彼は道家と言うよりサディストだった。そんな神経質なま行たちだが、最も寛容なのは”も”であった。苛苛していても彼は笑いながら許し、優しく対応した。

ま行と気が会うのは意外な事に攻撃的な行であった。もしかしたら神経質さの質が違うから、お互いそれで牽制し合っているのかもしれない。

や行

通常五十音の一行は五つある物だが、や行はやゆよと三人しかいなかった。彼らは頭脳明晰な策略家で、トランプが大好きであった。"き"、"し"、"ち"等、"い"を覗く「い」の母音に属する神経質な者たちに対して身を小さくして、"きや"、"しゆ"、"ちよ"と相手をなだめすかす事ができた。特に策略が隙だったのは"や"で、アイデアマンであった。その点"ゆ"は冷静沈着で、理性的な適切な判断ができた。"よ"は三人の中では最も行動的である。調べ事が好きでもあった。

ら行

ら行はお高くとまっていたためにある種の人には嫌われていた。事実彼らの行動は誇張めいた演劇のような優雅な仕草をしていて、常に微笑していた。彼らは自分が才覚に優れた貴族だと思っていた。

”ら”は詩人でひたすら耽美的な詩を書いていた。”り”は礼儀にうるさく、下々の礼儀のなさに腹を立て、いつも注意していたために、周囲からうざったいと思われた。”る”はタキシードを着た紳士だが、したたかな、怪盗紳士やドラキュラのような不気味さがあった。”れ”はガーデニングが趣味で、常に上品さを保っていた。

”ろ”は小説家で、自らの性質を反映するかのごとく重厚で渋く厳しい長編小説を書いていた。

わ行

わ行は昔四人いたのだが、今は壊滅していた。”ゐ”と”ゑ”は死んでいるも同然だし、”を”は昔は”お”の代役をしていたが、いまや殆どが失われ、たった一つの助詞という仕事しかする事が出来なかった。その中でも頑張り続けたのは”わ”である。彼はもともと情熱的でエキセントリックな性格であつたが、太古にわ行が崩壊して以来しだいに気が狂つてヒステリックになつていた。彼は”ゐ”と”ゑ”の仕事を奪つたも同然の”う”を深く恨んでいた。”は”が同じ音の癖して助詞と言う役職に就いている事にも腹を立てていた。そういう彼とは裏腹に”を”は諦め切つていた。名詞の頭にもなれない彼はただひたすら助詞の仕事のみをやり続けるしかなかった。片仮名として”ヲ”になつてもだれも見向きはしない。だが、自分は”ゐ”と違つて助詞という約束があるじゃないか、だからせめて与えられた一つの仕事を誠実にこなそうと彼は思ったが、逆に仕事の多様性が全く無かつたがために虚無感を募らせていた。だんだん顔が虚ろになる”を”についても”わ”は怒りを覚え、次第に精神状態が危険になつた。これが後に述べる破滅へと舞い込むことになるのである。

ん

”ん”は何行にも属さないためわ行の部屋に住んでいた。彼は皆から死神だの奈落の神だのと恐れられていた。彼は先頭に立つ事も無く、自分の事を一切語らなかつた。にもかかわらず全ての五十音は彼の個性に圧倒された。彼は虚無であつた。彼が真後ろにいるといつのまにか思考が停止していた。例えば刺々しい”か”と”ん”が共にいた時、”か”の刺々しさは”ん”の虚無の中でどこかしらむなく反響し消えた。そしていつのまにか思考を失つた”か”は恐れて”ん”から離れた。母音でも子音でもない、彼は得体の知れない存在だつた。

以上が五十音の全てである。実際は四十七音しかないのだが、彼らは五十音と呼ばれていた。彼らの仕事は言語の構成であつた。あ行か行と行ごとの部屋の中央にホログラムビジョンがあり、呼び出しに応じて彼らはホログラムビジョンの中に入つて、言語を構築していった。

彼らの先祖は漢字だが、漢字は今や彼らに頼りきつていた。体面だけ守るためだけに漢字たちは利用されたのだ。

以上が五十音の全てである。

第二章・・・事件

九月や十月は大抵の学校で授業参観が行われる。そこに生徒の親達は我が子の普段の授業の様子を観察するために来るのだが、何故か先生らはその時を見計らって通常ではない、何らかの特殊な授業をする事が多い。

この日、舵北市立舵北小学校では国語の授業で、授業参観に合わせ生徒に作文発表をさせる事にした。テーマは「夏休みの思い出」である。最初に指名されたのは端の席にいた尾嶋優介と言う少年であつた。

「任務：要五十音総員」

ブザーと共にホログラムビジョンに漢字のみの文字が映し出された。享楽主義者の”ふ”は疑問に思つて”は”に、いつも漢字に面倒な仕事を任せているのだから総動員する必要もないのに、と言つて”は”は小学生の作文で漢字が一つもないからだよ、と答える。やがてホログラムビジョンは原稿用紙を映し出した。

優介少年は原稿用紙を広げ、題名を読み上げた。

「なつやすみ」

”な”が”つ”に酷く絡んできたので、よほど「なつ」と転ばしてやろうかと思つたが、そうすると”な”を酷く嫌つていた”や”に衝突してしまつたため我慢していた。”み”が明らかに愚痴を言いたげだったので”す”が彼を目で黙らせた。それらの様子を”や”は観察していた。

「おじまゆうすけ」

優介少年は次に名前を読み上げた。やはり自分は名前に選ばれない存在なのだと毎回”を”は、再びビジョンに登場した”お”を見つめながら思つた。だからいずれ来る助詞の仕事をきちんとこなそ

うと決意した。”し”は押しの強い”お”が苦手であつたため、気分を濁らせていた。”ゆ”、“う”、“す”は犯罪的笑みを浮かべる”け”に心配ぎみであつた。

優坊つたらすつかり字の読み書きが出来るのね。尾嶋夫人はそう思ひながらたどたどしく文字を読む優介少年を見入っている。彼は本文を読み始めた。

「ぼくのなつやすみの」

安楽を愛する”ほ”は、発狂して且つ攻撃的な”く”とはとてもじゃないけど付き合いにくく、濁音になる。その彼らと前述した「なつやすみ」達を、”の”が仕事とは知りつつ、飽きつぱく助詞として流して行く。

「いちばんのおもいで」

だつてさあ、”て”のやつがさあ、ぼくをなぐつてくるんだよ、ひどくない？と”ち”は”い”に愚痴を言う。傍から聞いててあまりに腹立つので”は”が激しくうるさいと怒鳴るが、いつの間になぜ怒鳴つたかを忘れる。背後に”ん”がいたからだ。件の”て”は濁音として暴れていて、”お”と”も”と、”ち”を見捨てた”い”が彼をなだめようとしている。まってよう、と”ち”は言うが、”は”さえも彼を見捨てて独りぼっちとなる。”は”には次に助詞の仕事が来るはずだという長年の勘があつた。

一番の思い出、の次の文字は原稿にこう書かれていた。

「わ」

”は”は思わず「は？」と大声を上げた。優介少年は”は”と”わ”を間違えていた。”ち”で苛々していた事もあって、嬉しそうな”わ”に対する憤りは高まつた。

「えいが」

”え”と”か”はいがみあい、”か”は濁点が付くほど怒り狂っていた。なにが、ですが、思います。 ”い”は急いで中に割込んで止めようとする。そして次の文字。

「お」

お…お…お…”を”は深く絶望した。優介少年は「お」と「を」を間違えていた。その間違いで”を”は唯一の仕事を”お”に奪われる事になった。”お”は戸惑っている。”を”は危機を感じた。このまま”ゐ”や”ゑ”のように”お”に仕事を換えられ、居場所を失うのでは。その危機感は狂いつつある彼の心を蝕んだ。”ゐ”と”ゑ”は相変わらず虚ろな顔である。三年程前からあの表情だ。何故だろう。

「みにいった」

”み”は優越感に浸っていた。自分一人で「見」が表現できるのだ。その様子をはいはいと冷たく助詞”に”は受け流し、”つ”が”い”を転ばして”た”に衝突するのを見た。

「ことです」

実直な最初の二人は何事もなく「事」を作る。まだ暴れている”で”を”す”が慰める。”す”は”て”の事を深く思い遣っていたため、彼が濁音になるといつも傍にいた。そうすれば円満解決だったからだ。

僕の夏休みの一番の思い出は映画を見に行った事です、と優介少年は最初の一文を読み上げた。すごい優坊、立派に文を作ってるじゃない、と尾嶋夫人は感激した。

優介少年は次の文を読み始めた。

「だいめい」

先ほど”た”に衝突した”い”は、憤る彼に平謝りした。そこに”め”が目をつけ、ちゃんと注意しなきゃだめ、怒らしちゃだめ、と割込んで注意した。気の弱い”い”はひたすら謝る。次は助詞として”は”の出番のはずだったが、やはり

「わ」

と書かれている。思いがけない機会に”わ”は得意気だ。”は”は憤る。そして次の文、

「おぼえて」

と未だに”ほ”が苛々している中、”は”は戻って来た”わ”に激しく抗議した。あなたは助詞でもないでしょう。本来ならそこにいるべきでないし、あたかも当然かのように振る舞うのはおかしい。

”わ”は答える。貴様は文法という法律に縛られて物事を言っているが、我々五十音字は人間サマがいなければ成り立たないんだぞ。そして人間は助詞として私を選んだ。子供がだぞ。これからの未来を背負う子供がだぞ。思い上がりめ。貴様の助詞としての仕事はいずれ時代遅れになる。”わ”のその言葉を助詞でしかない”を”は聞いてしまった。

「いませんが」

違う、と”は”は言い返す。子供だからこそ我々をあまり理解しておらず、間違えたのだ。”わ”よ、あなたは手違いで助詞になっただけだ。思い上がりは貴様だ。”わ”はそれを聞いて身を震わす程に激怒した。その時、

「アクション」

周りの五十音達がその出来事で思わず片仮名二ナツタ。”わ”ガ”は”二飛ビカカリ長イ左腕デ”は”ノ短イ首ヲ絞メ上ゲタ。ソノママ”は”ハ、仰向ケ二倒レテ、死ンダ。

「えいがです」

ソシテ平仮名に戻った五十音達はその出来事についてがやがやと話した。”て”は怒り狂ったがすかさず”す”がなだめた。その時、”ん”がゆっくりその細長い身体で”は”に近付いたので皆は静かになった。あいつが死んだ”は”に何かしようとしている。何するのだろう。皆はじっと見つめる。”ん”は身を屈め、”は”の額に接吻した。”は”の身体はたちまち風化し、”ん”の口の中に入った。

題名は覚えていませんがアクション映画です。そう読む優介少年に尾嶋夫人は、まー優坊ったら、調べもせずに書いたのね、と少し咎めたがすぐに、でもその場で文章を書けたって事ね、すごい優坊、

あなた文才あるわ、と親バカな感激をしていた。この後に破滅が訪れるのを知らずに。

突然優介少年に異変が起きた。原稿を持ったまま彼は立ち尽くしていたのだ。次の文には、はじめてのえいがでした、と書かれていた。だが、”は”はすでに死んでいる。文字であった頃の屍が文章中に漂っているだけであった。”は”はじめてのえいがでした。だが、その”は”はもういない。中身のないただの文字。”ん”と同じ虚無の存在。

「んじめてのえいがでした」

優介少年がそう読み上げたが異変に気付く者は当然いない。単に滑舌が悪かっただけだろうと思われるだけだ。

「えいがおみるまえに」

そして再び”を”は優介少年に見捨てられ、”を”は次第に思いつめていた。貴様の助詞としての仕事はいずれ時代遅れになる、時代遅れ、時代遅れ・・・”わ”の故”は”に向けていった言葉がいまだに心に残る。確かに自分は”は”同様、この文章に無視されている。自分はやがて”ゐ”や”ゑ”みたいに忘れ去られてしまうのか。私など必要なのか。そんな気持ちも一切察しない”わ”は錯乱していて、今もなお虚ろな顔をしている”ゐ”や”ゑ”の復讐をしよう”う”までも殺そうとしている。ところが”む”がそこに立ちはだかり、あっけなく致命傷を負ってしまう。

「ポップコーンお」

”ほ”と”ふ”がおどけている間もなく、三度見捨てられた”を”は自殺した。自分より先に死んだ彼を見た”わ”は、もはや行方もシマイだと自棄になり、致命傷を負わせた”む”に仕返しにと死ぬ気で襲い掛かり、その短い首を締めて殺した。だが、それは”む”ではなかった。”お”であつた。似ていたために間違えたのだ。でもいい、”を”の復讐ができたのだから、と”わ”は思いながら事切れた。

”お”が死んだことで、同じおの母音を持つ者達、すなわち”こ”、”そ”、”と”、”の”、”ほ”、”も”、”よ”、”ろ”は自らの存在意義を失って、そのまま”ん”の虚無へと消え去った。何と言つことか。五十音が総動員したにも関わらず、まだ”そ”と”よ”と”ろ”が活躍しないままその命を終えるとは。

そして文末。

「かいました」

んじめての映画でした。映画を見る前にポップコーンを買いました。五十音字にこれだけに異変が起きているのに優介少年がここまでほぼ正しく読めるのは奇跡としか言いようがない。もはや次はどうにもならないのに。

次の文には、ポップコーンは、と書かれていた。だが、”ほ”や”こ”はすでに死んでいる。優介少年は無理矢理

「ンップコーンん、」

と読み上げた。誤って癖で死体を転ばしてしまった”ッ”に”プ”は笑って見せたが、心中は寒々しかった。優介少年が妙な発音をしたので、先生が、どうした？と言おうとした。ところが、口から発せられたのは

「んんした？」

であった。こうして”う”は死んだ。彼は母音がおの者と一緒にいると”どう”「こう」「そう」とその者に圧倒されて依存する傾向があった。そして死人の”ど”の虚無に、圧倒され、自分自身も虚無になってしまったのである。その事で母音がうの者は皆死んだ。

”く”、“す”、“つ”、“ぬ”、“ふ”、“む”、“ゆ”、“る”。

”ああ、哀れな”ぬ”よ。内気で引き籠もりの彼はこの原稿用紙上で何も働かぬまま死んだ。使用頻度が少ないけれどもあるが、とにかく彼に合掌。”やは”ゆ”と”よ”が死んだためにや行の部屋で一人ぼっちだ。彼はしだいに狂気に蝕まれた。

次の文には、おかあさんとぼくのふたりぶんありました、と書かれていた。だが、その殆どは死んでいた。

「んかあさんんんんたりんんりました。」

優介少年はとうとうパニックになった。尾嶋夫人はさすがに異変を感じて優坊！と呼ぼうとした。だが如何なる口の形をしようと咽喉からは

「んんんん！」

というハミングしか出なかった。彼女はいつもの息子の愛称が呼べなくなりうろたえた。彼女は何度も叫んだ。「んんん！んんん！」やがて彼女は「ああああ！」と悲鳴を上げた。「あ」はリーダーとしてどうすればいいのか身を縮めるしかなかった。どうすればいい。五十音がどんどん死んで行く。しかし字が死ぬとはどういうことか。詩人の「ら」が答えた。簡単な事、我々の死は、人の死に同じ。人が有機物と言っただけの物質の上に意思があるように、私達は文字と言っただけの記号の上に意味がある。人が死ねば、身体はただの外界の物質だけの存在になり、私達が死ねばただの記号、否、模様以下の存在です。ではあいつは何者だ。「ん」ですか？「ん」は支配者。何を言うか、支配者は我々母音だ。表面的には確かにそう。「ん」は確かなんでもない存在、究極になんでもない、無の存在。だからこそ彼は五十音の全てを統合する本質的支配者なのです。そういう「あ」と「ら」の問答をよそに、わ行の部屋では「なが、いよいよあなたの時代ですね、と」んに話しかける。第一章に前述したように、な行らは自分が母音から生まれたのではなく冥王「ん」から生まれた、だから自分は「ん」の手下なのだ、と思っていた。「ん」はひたすら無言であった。何を考えているのかも分からない。むしろ何も考えていないのかもしれない。それでもいいのだ、と「な」は思う。死の不安に怯える母音たちに対し、自分達な行は優位に立てると思えるだけでも安心だったからだ。「あ」は尋ねる。今、何人が死んでいる。「い」は答えた。ええと、「は」と「わ」二人、母音がうの者全九人、母音がおの者全十人、合計二十一人ですね。我々は四十八人ですから生存者は差し引き二十七人次第に増えつつある死者を止めなければ。どうしてこんな事が起こったんでしょうかねと「ま」は言い、「ら」はこれは五十音字の不完全さから発生した、起こるべくして起こったことなのです、と言う。

「たんけて！」「たんけて！」

教室内で助けて、という悲鳴が聞こえる。言葉が所々出せないのも意味不明な言葉が多々ある。人々が死んだ文字を言うたびに屍と隣同士になるので皆戦々恐々としていた。皆は隣に”ど（ん）”がいたことであっけなく死んでしまった”う”の事を思い出していた。自分も”ん”に飲み込まれるのではないか、と思ったのだ。

「たんけて！」「たんけて！」「しゃべれない！」

しゃべれない、だけ明瞭に発音できる事がなんと皮肉な事か。

”ん”に対する恐怖が秒毎に増した。”ん”を殺すべきだと”あ”は言い出した。でもどうやって？と”い”は言う。死者は皆、もとの姿でありながら、中身は”ん”になっている。もし彼が殺意を察したらその二十一の死体が襲い掛かるに違いありません。そんなことは大丈夫だ、と”あ”は楽天的に言う。そういえば彼は楽道家だったと”え”は皮肉の笑みを浮かべて冷ややかに見つめる。そんなことは大丈夫だ。そいつらは”ん”を入れて二十二、我々は二十六人、人数的に有利だ。そう自信持って”あ”は言うが、直後に”り”から報告が入る。な行ら三人、”な”、”に”、”ね”が自分は”ん”の家来だ、母音どもには従わない、これからは我々の時代だといいい始めております。謀反です。何？と”い”は驚く。するとこちらは二十三、あちらは二十五。さらに悪い知らせが”ま”から届く。”ゐ”と”ゑ”が今現在死亡している事が分かりました。馬鹿な。入るじゃないか。ほら見る、監視カメラに。 ”あ”の言う

とおり、映像にはわ行の部屋にその二人が虚ろな顔をしてたっているのが見える。だが、“ま”は答える。さようですが、どうも彼らの様子に私は不審に思っ、て、思い切って“ん”に尋ねたのです。なに？ 奴に尋ねたのか。よくも生きていたな。はい。私は“ん”に、あの二人は死んでいるのかと尋ねました。すると彼は、三年前からと答えました。始めて彼が喋るのを見ました！ 初めて！ そんなことはどうでもいい、“ま”よ。で、三年前ってどういうことだ？ そりゃ簡単な話ですよ。あの“ゐ”と“ゑ”は確かにここにいます。ですが、同時に死んでいるのです。中身も何もない、今ホログラムビジョン内を跳びまわっている“ん”どもの一人ですよ。と、言うことは、“と”い”は震えながら言う。こちらは二十一、あちらは二十七、不利じゃないですか。“あ”は叫ぶ。じゃあアルファベットがあるじゃないか！ 彼らを味方にすれば、それは無理でしょうと”え”は冷たく”あ”の言葉を遮る。彼らの思考は我々五十音字と根本が違います。母音と子音の区別が曖昧で、我々のような明確な主従関係はなく、皆が自己主張しております。で、我々は彼らと会話しようとして片仮名二ナツテマ意思疎通ヲ行イマシタガ、正しく伝わった試しがありません。彼らも私たちと意思疎通を図って、ローマ字を発明しましたが、“し”をすいと言ったり”ち”をていと言ったりとトラブルがあまりにも多いです。それにアルファベットには”ん”に相当する存在がないため共感して協力してくれそうにもないし、第一、日本だけの我々と違って、彼らは世界中の国を相手にしているのだから忙しいにも、わかったわかったと”あ”は遮り返した。それでも我々は死の化け物と戦わなくてはならない。そうだ。不利とはいえたったの六人差だ。

そうか、戦いか、と”に”はにつと狡猾な笑みをうかべる。だが、冥王”ん”様に勝てる者などいない。なぜなら二十三の死の軍隊が彼の中にあるからだ。冥王が生命の危機を感じたらすぐにそいつらを呼び寄せるに違いあるまい。”ん”さま、二十一もの五十音があ

なたを殺そうと企んでいます。”に”がそう言つと”ん”は何事も無く死んだ者たちを蘇らせる。だが、”に”の思惑は微妙であるが外れていた。”ん”はただ”に”の願いを汲み取つてそのままの反応をしただけである。彼は自分からは何も考えていなかったに等しい。今わ行の部屋には無数の死の軍団がいる。”に”はそこに”ぬ”や”の”がいるのを発見して、同士の蘇生だと喜び、良く来てくれた、と握手をする。その手のぞつとするような冷たさにひえつと彼は思わず手を離す。

「たんけて!」「たんけて!」「んんん!」

人間達はいまだ焦り叫んでいる。何がどうなっているか把握できないで入る。すっかり喧騒に満ちた授業参観に先生らは困惑していた。先生は叫ぼうとする。みなさん、おちついてください。だが、「みなさん」こそ言えた物の、それ以後は「んちんいてんださい」と意味不明な抑圧された言葉となった。そのうち教室内は静かになった。もうまともに言葉が発せられなくなったと彼らが悟つたからであった。人間達が言葉を使わなくなったため戦いの準備は着々と進んだ。

授業参観はその後静かであった。

第三章・・・戦争

言葉とはある種の伝えにくい事柄について意思疎通を行うための暗号とも言える。もちろんそれらは勝手に理由なく決まった訳ではない。落ち着いて欲しい時の言葉は落ち着いた響きになるし、危険な時は耳をつく言葉になる。言葉は声である以上響きを由来としているのは明らかで、その響きは大自然の何らかの模写とも言える。それは文字のかたちにも同じ事が言える。言葉は自然の産物であり、文字も同様だ。しかしそれらは意味があつてこそだ。もし言葉のうちどれかがただの響き、ただの模様と認識されればその言葉には意味がなくなる。それは人間も同様だ。もしある人間が只の有機物であればその人間には意思がなくなる。すなわち死。

殆どが死んでいるこの文字上で戦いは始まった。五十音と反逆者らの戦いである。五十音らはあ行の部屋に集結している。部屋中央のホログラムビジョンには沈黙の教室が映し出されていた。壁ぎわにコンピュータがあつて以下の文字がディスプレイに映っていた。

状態：

五十音「あ・い・え・か・き・け・さ・し・せ・た・ち・て・ひ・
へ・ま・み・め・や・ら・り・れ」21名

反逆者「な・に・ね・ん」4名

死者「う・お・く・こ・す・そ・つ・と・ぬ・の・は・ふ・ほ・む・
も・ゆ・よ・る・ろ・わ・ゐ・ゑ・を」23名

このうち誰かが死ねばそいつは死者の欄にうつると言う仕組みだ。ところで”い”よ、死者の軍団を確認したそうだな。そうです、今は切られています、監視カメラに映っていました。ほら。状態：を映し出したディスプレイが即座にわ行の部屋のある時の光景になる。”な”がようこそ同士よと死んだ”ぬ”と握手するがその手の

冷たさにひえつと手を離す。なるほど。でもどうやって死者を殺すんです？だつてすでに死んでるのですよ。ウヒヒヒ、はい、僕に一つ提案があります、又ヒヒヒ。死者の本質は”ん”です、ククク、だから死者は放っておいて”ん”を狙えばいいのです、又ハハハ。なるほど、しかし”や”よ。どうして笑っているのだ。ええ？ウヒヒヒ、や行は私しかいないんですよ？だからおかしくって。そうか”あ”は”や”の策略に気付かない。そして皆に叫ぶ。と言う訳で”ん”を最優先に狙え。死者どもは防衛程度だ。でも、武器はどうするのですか？馬鹿者お前ら五十音は一文字一文字違う形をしているだろう。自分の特徴を有効利用し、ちよつと静かに。”い”が”あ”を遮る。ホログラムビジョンの向こうで尾嶋夫人が優坊と呟こうとする。だが口からでるのはやはり

「んんん」

ビジョンから”ゆ””う””ぼ”が飛び出た。大変だ！人間の様子見のためなのに侵入口に使われた！逃げろ！ビジョンを閉じろ！皆自分の部屋へ！こいつらは私ら母音が食い止める！その必要はありませんよ。ら行の三人が現れる。あなた達母音の命は貴重です。死なせる訳にはいきません。私たちの部屋に逃げて。あ行がら行の部屋に逃げる間、”ら”は頭の武器で”ゆ”に、”り”は剣で”う”に、”れ”はカギツメのある左腕で”ぼ”に立ち向かう。だが”らは”ゆ”の穴に首を挟まれ、”れ”は”ぼ”の二本の右手に握られた槍に突かれ、哀れかわす暇もなく二人とも死ぬ。”り”だけは”う”の頭の武器に何とかかわすが、”う”の背後に”ゆ”と”ぼ”、そして”ら”と”れ”が虚ろな顔でこちらに迫って来る。”りは悲鳴を上げる。”ら””れ””そんな”私だよ、思い出せ、私だ、やめろ、ぐつ、やめろ、思い出せ、思い出せ、記憶がないのか、そうだ、死んでいるからか、ぐ、う、あ、あ。

”や”は策略が上手くいった事にほくそえみながらわ行の部屋に向かう。大量のゴーストどもを背後に”に”が彼に話しかける。何の

用だ。死にに來たのか。死ねば我らの仲間だが。”や”はいいえと答える。お役に立ちたいのです。私には策略の才があります。確かに、と”に”は言う。だが、だからこそ信用出来ぬ。私が受け入れたとたん貴様は正体を表して殺すのでは。いいえそんなつもりは毛頭に、あ、そうです、あなたの母音はいでしよう？何を言うか！私は”ん”からできた者だぞ！いえいえ、事実そうですが、つまり、私は小さくなつて。なるほど”にや”として合体したいと。そうです。私はもともと単体で「矢」と言う武器を表現できますが、だからこそこの世界では戦闘能力がありません。だからあなたを殺そうとしても無駄で無意味で、その代わりに私のこの発想力、や行らのトランプで身につけた二八八八洞察力で必ず。”ね”はふと思いついて言う。おまえは何の為に仲間を裏切っているのだ。動機を言え動機を。”や”は答える。この戦いは勝目がない気がしたからです。だが心の中は違っていた。彼の策略、それは全く持つて自分本位な物であつた。彼は死を恐れていた。母音”あ”が死んだら自動的に自分も死ぬ。その時の保険として自分は母音がいとの者と合体する。もし”あ”が死んだらその者に依存すればいい。なぜなら”やはその時だけ母音の位置にいるからで、”あ”が死んでも自分は母音として存在意義は確立するのだ。いわば”に”への寄生である。ホログラムビジョンが閉じられたそうだ。やはりか。ならばこの部屋から出撃するしかあるまいな。”な”は”にや”に言う。その時”や”は”に”に忠告する。母音は殺さない方がいい。生け捕りにするべきだ。”や”の言いたい事を”に”は察する。母音が死ぬと自分達も死ぬかもしれない。それは危険で無意味な事だ。同じ事を”な”に忠告する。そしていよいよ戦いの準備となる。

同じ頃”あ”は五十音らに戦うよう放送で呼びかけた。真つ先にそれに応え、軍団の先頭に立ったのは好戦的な行であつた。その後に行、た行が後に続いた。は行の二人、”ひ”と”へ”は狂いかけていて戦闘不能になつており、放送を聞くなり”ひ”けたたまし

く笑い出し、”へ”はひたすら黙っていた。た行の後ろはま行であった。”め”はふとあ行の部屋から何人かがこちらに来るのを確認し、誰だろうと「目」を細めると、ら行の三人であった。彼らが最後尾だなど”め”は悟った。だが、彼らはいつもの気高さはなく虚るな顔をしている。たちまち”め”の心に道徳的サディズムが沸き上がる。何ですか、その腑抜けた顔は、これから戦闘だというのにやる気がない。そんなのはだめ。め。先頭に立つ”か”は後方に母音がないのを不思議に思いながら薄暗い廊下を歩く。そのうち先に大量の死んだ文字どもの影がこちらに迫るのが見えてきた。だが”め”は後方のら行らを叱るため逆方向を歩き出す。相手は死人ですぞ。そんな死人のような顔で倒せるはずが。一方先頭はあああああああああああと言いつ掛け声と共に一気に死人の群れに突入する。狭い廊下でその戦いはくり広げられる。逆方向に歩く”め”は今や、このやる気なしのろくでなしが、と言いながらついに”り”の間近にくる。ばかじゃないの、しんでしまえ、ばかばか、あれ？”め”は驚いた。それは良く見ると”りゆ”であった。たちまち”ゆ”は”ゆ”になって”め”に飛び付く。うわ、助けて、うわ。大変だ！ビジョンから現れたあの死体が！”ま”は叫ぶ。早く”め”を助ける！”み”は助けようとする。だが”ゆ”と”め”の外観が似ているためにどれがそれなのか判断しかねている。”ゆ”と”め”の戦い、”ゆめ”の戦い、これは夢の戦いなのか。二人は未だに揉合う。なにをぐずぐずしている、早く！”ま”の叫びで”み”は我に帰る。適当にすくいあげろ！の言葉に従い”み”は無作為に一人を助け出す。それは突然姿を縮めて”み”に飛び付く。わっ。死人の”ゆ”だった。”みゆ”になった彼はそのまま母音の”ゆ”の虚無に吸収され、0の掛け算のように消滅する。”ま”は助かった”め”と共に、後方からも敵が！と叫びながら先に行く。かくして先頭の戦闘、後方の恐慌を経て戦いは大混乱となる。

”す”はどこだあ。”で”は叫び回る。自分は怖い、怖いのだ、どこにいたのだ、返事してくれよ。叫ぶ”で”に”ふ”が飛びかかる。”で”は難なく軟弱な彼を抱えて壁に向かって投げつける。

わわわ、来るな来るな。”ま”と”め”は必死に逃げ惑う。後ろから”み”を含む多数の死者達が押し寄せる。ま行の同胞に襲撃される恐怖で二人は思わず片仮名で身ヲ硬直サセル。彼ラガ普段苛々シテイルノハ、彼ラノ思考ガ専ラ現実的ダカラデアリ、コノヨウナ不気味ナ非現実的ナ現実ハ恐怖デシカナク、モチロン彼ラガ平仮名になる余地モナイ。ダガ、トウトウ追イ詰メラレル。

”ち”の戦闘能力は皆無に等しかった。常にビクビクしており周りの敵どもに怯えていた。それでも一応攻撃はして見せるがすぐに逃げてしまう。途中”で”を見かける。今さっき”で”は”く”の曲がった背中を逆方向にへし折るのを見た。”く”はそれ以後動かなくなつた。なるほど、とその瞬間を見た”た”は納得する。死者を殺すには物理的に戦闘不能にすればいい、なぜそんな単純な理屈が思いつかなかつた自分の馬鹿が。”ち”は怯える。”で”に苛められた彼はふと、奴に襲われるんじゃないか、と言う幻想に捕われる。それは”で”をみる度に増し、やがて幻想を乗り越えて妄想となり、”で”は僕を殺そうとしている、と言う内容に変わり、果ては、奴は裏切り者だ、殺さねばならぬ、自分の勇気を示す番だとまで思い込み、やがて激しい掛け声と共に”ち”は”で”に襲いかかり、敵と勘違いされあつてなく戦闘不能なまでに殺される。そして再び”で”は”す”を探し求める。どこだあ。どこだあ。”す”はいつも彼が困つた時悲しい時腹立つ時に側にいてくれる。そうすれば彼の荒んだ気持も「」です」のごとく丁寧に解決してくれるのだ。

ドウシテ”メ”ハスグ殺サレテ、自分ハ縛ラレテイルモノノ無傷ノママ死者達ニ連レラレルノダロウ。命乞イヲシタカラカ、イヤイヤソシテ”で”ソシテ”で”ソシテ”で”ソシテ”で”ソシテ”で

”ガ叫ブノガ見エル。どこだあ。”す”どこだあ。”で”は探し
回る。あたりは戦闘で入り乱れている。向こうでは”き”が四本の
ナイフで”る”のステッキ攻撃を交している。後ろでは”ひ”と
へ”がなにもせず歩いていて。左を見ると……”す”！常に無表情
の彼が”で”を見つめて来た。”す”！”で”は嬉々として彼に駆
け寄る。探していたよ！どこにいたんだい！助けて欲しいんだ！こ
の戦いで気が変になりそうなんだ！怖いんだ！本当に！怖いからつ
い戦っちゃうんだ！怖い怖い怖い、助けてください！俺はぐはっ！
”で”は”す”に胸を刺される。死を悟った”で”はあまりの出来
事に頭がさつと冷える。あろう事が嫌われ者の自分に最も親切だっ
た”す”に殺されるなんて。どうしてだどうしてだ。”す”の顔を
見つめる。その顔はよく見ると無表情ではなく虚ろである。

そうだ、彼はとつくの前に、”う”が死んだ時に死んでいたのだっ
た。なんでそんな事に気付かなかったんだろ。あははは、あはは
は。”で”は笑いながら泣き出した。あはははは、うつつ、ふへ
へへ。そのうち意識はふ、と無くなり”で”は事切れる。

ご苦労さん、もう戦闘に戻っていいよ。”な”ノ声ガ聞コエル。後
は”い”だけだな。ソノ言葉や、傍二”え”ガ捕マツテイル事カラ
判断シテ、ドウヤラ彼ラハ母音ヲ人質ニトルツモリデ、自分ハ片仮
名ノ”ア”ト勘違イサレテルノダナ、タブンコノママ片仮名デナケ
レバイケナイシ、間違エテモ平仮名には戻ッテハイケナイノダナ、
ト”マ”ハ考エツク。イマ、ココわ行ノ部屋デハ自分ト”え”トな
行ト宿敵”ん”シカイナイ。アレ？”マ”ハフト氣ツク。アレハ”
にや”ジャナイカ？”や”メ、寝返ツタナ。お前はやはり役に立た
ないじゃないかと”に”は”や”に言う。そんな事はありません、
と”や”は呟くが、”に”は、この大混戦の時には発想能力なぞ何
の役にも立たん、と言いつ返す。しかし”や”は、でも私は生きたい
んです、死にたくないです、と涙ながらに話す。その時になって”

に”は、どうして彼が寝返ったかを知る。彼の自分本位の策略に気づく。

さ行らは一風変わった戦法をとる”し”が前進し、その周りを片仮名の”サ”と平仮名の”せ”がぐるぐる回る。後二人が似た者同士だから思いついた案で、こうする事で敵の目をくらまして、わ行の部屋に突破して”ん”を殺す計略であった。

けけけけけ。 ”け”はふと笑いだす。そして何を思ったか”い”に接近して右手の剣で殺そうとする。やめろ、 ”け”！こちらは味方だ！どういふつもりだ！”い”の叫びに”け”は答える。先に殺すべきはな行達だ。だから貴様を殺す。そうすればな行の一人は死ぬ。 ”け”の理屈は正しい間違った手段に”い”は身震いする。だがやがて彼は切り殺される。こうして”き”と”ひ”の二人の発狂者は人知れぬ場所で死ぬ。 ”し”も死に、直後に”せ”は死人になった”し”に刺し殺される。 ”サ”は異変を察して彼らから離れ、わ行の部屋に向かって逃げ出す。そして”に”が死んだ。驚いて”や”は彼から逃げ出すが”に”の巨大な口に挟まれてしまう。その圧力に”や”は激しい苦痛を味わう。わああ、助けてくれ。 ”さ”がわ行の戸を抜けた時は”や”はべしやと潰さればらに砕けた。すかさず”に”の口蓋に槍をつき戦闘不能にした”さ”は部屋の中で立ちほだかる三人を見た。 ”な”と”ね”と、そして”ん”。

”か”に見事に惨殺された”け”はその激しい損傷で立てないでいた。 ”か”が、彼は生きている方が危険だと判断されたからだ。物理的に戦闘不能にすればいい事は、先ほど死んだ”た”からの助言からの情報だった。とうとう仲間を殺してしまったな、と”か”は溜め息をつく。もう人数が少ないだろうに、あと何人生きているのか。だが、考える間もなく彼は”を”の襲撃に遭う。思いがけなく

”を”は強く、”か”は苦戦の末死ぬ。

状態：

五十音「あ・え・さ・へ・ま」5名

反逆者「な・ね・ん」3名

死者「い・う・お・か・き・く・け・こ・し・す・せ・そ・た・ち・
つ・て・と・に・ぬ・の・は・ひ・ふ・ほ・み・む・め・も・や・
ゆ・よ・ら・り・る・れ・ろ・わ・ゐ・ゑ・を」40名

あと六人：あ行の部屋に来た”へ”はコンピュータのディスプレイを見て驚愕する。これはもうだめだ。死者どもを減らすしかあるまい。”へ”は希望を信じて閉じられたホログラムビジョンを開く。だれかがこの多くの死んだ五十音字を言えばそいつらは一時的にビジョンの向こうに行くはずだ。ところがビジョンには何も映らなかつた。真つ暗な穴だつた。どうしてだ、と”へ”は苦悶する。彼は前にビジョンを閉じた事で人間との繋がりが断ち切れた事に気付かない。そのうちビジョン間を通じて大量の死人があ行の部屋に飛び出し、”へ”は反撃する間もなく死す。

この馬鹿馬鹿しい戦いを辞める。”さ”はまずな行の二人に言う。だが”な”は答える。無理だね。もう沢山の死者が出た。お前らが死ねば戦いは終わる。だが、と”さ”は言い返す。母音が死ぬとお前の命はない。ないだと？ところがどっこい母音は人質にされている。私らな行の天下の時代には彼らは常に幽閉しておく。日本語を変えるのだ！な行から始まる五十音に！日本語はこれから我らの時代だ！早く気ツケ”さ”。早く。ソウカ、ヤハリ私八間違エラレヤスイノダナ。ナラバ危険ダガコレヲシヨウ。オ、”さ”ガ見テル。今ダ！私八一瞬だけ平仮名ニナリマシタ。”さ”は目を疑った。あれは人質の母音の”ア”じゃない！”マ”だ。ある策略が思いつく”な”様、でも最後に”あ”の姿をお見せください。よかるう。”

ど、ビジョンから死人が大量に飛び出す。”あ”が死んだ事で揉合
っていた”さ””な””ま”の三人は死ぬ。死体が降り積もって来
る中”え”と”ね”が互いに首を絞め合う。どちらが早いか、血走
った目で見つめ合う。やがて”ね”の左腕から力が抜ける。”え”
は致命傷を負う。

突然静かになった。死者達が消えていたのだ。今ここには”え”と
”ん”しかない。前後関係から”え”は悟る。全てはな行らの仕
業か。だからな行ら皆死んで死人も消えたのか。人間達が言語を使
って文字を呼び寄せたように、彼らは”ん”から呼び寄せたのか。
自分も死者を呼び寄せる事ができるのだろうか。いや、もう呼び寄
せずともそばにいる。だつてごらんさ。まわりにもじにかこま
れている。じぶ”ん”たちはホログラムビジョ”ン”をつうじて、
に”ん”げ”ん”にもじをあた”え”ている、とおもっていたが、
このせかいとて、ビジョ”ン”にうつったせかいのひとつなのか。
そうだ、これがもじでかかれたものがたりだからだ。”え”は死者
を呼んだ。ああ、あ、い、う、お、なつかしのともよ。これからあ
なたたちのせかいにいく。しねばものがたりのいちぶになる。わた
しはかかれるそ”ん”ざいだつたが、これからかくそ”ん”ざいに
なる。そして”え”はし”ん”だ。のこるは”ん”のみ。だが、じ
ぶ”ん”はイレギュラーなそ”ん”ざいで、じぶ”ん”いがいはみ
なし”ん”でいる。もうじぶ”ん”がここにいないなどないのだ。
”ん”は死ぬ。

状態：

五十音「」0名

反逆者「」0名

死者「あ・い・う・え・お・か・き・く・け・こ・さ・し・す・せ・
そ・た・ち・つ・て・と・な・に・ぬ・ね・の・は・ひ・ふ・へ・
ほ・ま・み・む・め・も・や・ゆ・よ・ら・り・る・れ・ろ・わ・

ゐ・ゑ・を・ん」48名

とうとう全員死んで、この文字の世界に還る。もうこの世界には書くべき事はない。後は破壊されたもう一つの世界を創り直すのみだ。

第四章・・・死体によって創られた再生

「なつやすみ おじまゆうすけ

ぼくのなつやすみのいちばんのおもいでわえいがをみにいったことです。だいたいわおぼえていませんがアクションえいがです。はじめてのえいがでした。えいがおみるまえにポップコーンおかいました。ポップコーンはおかさんとぼくのふたりぶんありました。とてもたのしかったです」

優介少年は急いで書いたその作文を読み上げる。周囲から拍手が鳴る。尾嶋夫人は「すごいわ、優坊」と特に強く拍手する。優介少年は安堵と喜びの笑顔で席に戻って行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1391n/>

五十音字物語

2010年10月10日00時56分発行